

近畿出土の 円窓付土器をかんがえる

永井宏幸

本稿は、近畿出土の円窓付土器について弥生時代中期後葉を中心に14遺跡23例から検討する。23例は尾張地域からの搬入品ではなく、各遺跡に通有する土器の特徴をあわせもつ在来品である。近畿出土の特質として、脚付円窓付土器が多数を占める。加えて装飾のある類例に限った分布傾向から、野洲川下流域を基点に中期後葉前後の地域間交流がみえてくる。

はじめに

近畿の事例集成と位置付けは伊藤敦史らによる先行研究がある（伊藤1990・1994・2002、高橋1995）。伊藤は近畿出土例に多い脚付きを「傍流円窓付土器1類」とし、「正統派」と区別した。傍流とした理由は、円窓部を胴部上半の同じ位置に有して、明らかに形状として円窓付土器を意識して制作していることに加え、正統派にない胴部への施文、脚を付けるといった特徴をもつからと考えている（伊藤2002）。

本稿では、伊藤の指摘する装飾や脚付きの特徴を備える近畿の事例を中心に、今一度増加した資料群を再点検する。その上で、近畿出土土器の特徴を見出し、遠隔地交流の一端を示す。

近畿出土の諸例

(1) 滋賀県

滋賀県下は5遺跡7例ある。野洲川下流域に集中し、もっとも遺跡間の距離が近く、かつ点数も多い。

下之郷遺跡は、近畿第IV様式*を中心とした東西670m、南北460mにおよぶ3重の内濠を基軸に構成される集落である。

隣接する酒寺遺跡、吉見西遺跡など7ヶ所の方形周溝墓群によって形成された墓域を含めると2km四方の遺跡群である。調査は2012年

* 時期は近畿第IV様式を前葉、中葉、後葉の3段階に区分して記述する（伊藤2004）。

度までに90次を数える。そのうち、既報告分として円窓付土器は3次・4次・9次の調査から出土している。

1（3次）は3重の内濠のうちもっとも内側の溝（環濠1）底付近から出土している。近畿出土としては確実に平底と確認できる唯一の資料である。口縁端部および胴部上半に縦方向の調整と同一工具による波状文が4帯あり、胴部内面下半にタテ方向のケズリを入れる。窓部は横長の楕円形。近畿第IV様式中葉に相当する。

2（4次）は内濠のもっとも外側の溝（環濠3）から出土している。窓部は不定形気味ではあるが横長の楕円形。口縁部内面に楡の刺突文列、頸部から胴部上半にかけて、4条1単位の直線2帯+波状2帯が3単位ある2帯複合櫛描文を施す。3と器形・文様構成が類似すること

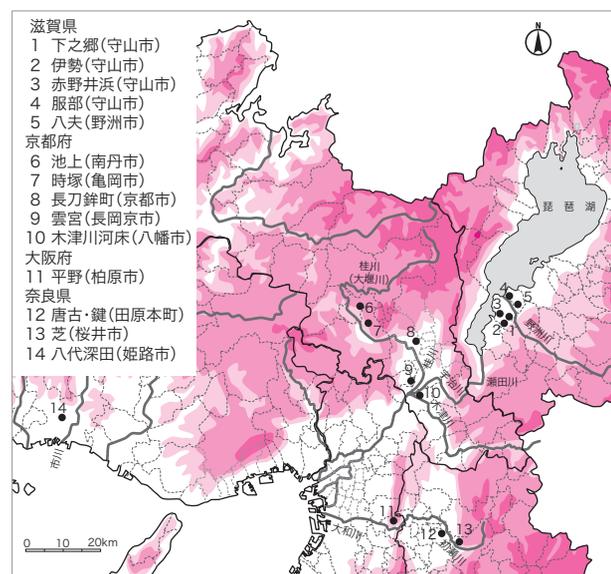


図1 近畿出土の円窓付土器分布図

から脚付きの可能性がある。1とは時期差があるようで、服部遺跡の報告では、環濠1→環濠3の変遷を示している。近畿第IV様式後葉に相当する。

3(9次)は溝資料で詳細は不明である。窓部は横長の楕円形。脚部の接合は円盤充填技法。頸部から胴部上半にかけて3条1単位の直+波による2帯複合櫛描文を施す。2とは器形、文様配置ともに酷似しているので、同時期の可能性が高く近畿第IV様式後葉としておく。

服部遺跡は、中期を通じて造営された360基を超える方形周溝墓群と円形竪穴建物を中心とした住居群がある。

4は径5m、深さ34cmをはかる円形竪穴建物SH040から出土した。窓部は横長の楕円形。器形の特徴は、口縁端部外面を横なでによる面取り、頸部は筒状にのび、口縁部は水平に開く。胴部は体部上半位までは球状に膨らむ。文様はなく、内外面ともにハケ調整が残る。4のほか壺、台付無頸壺、高杯、甕などが共存する。これらはおおむね凹線文出現期に相当し、近畿第IV様式前葉と思われる。

赤野井浜遺跡は、琵琶湖湖岸に位置する微高地上の遺跡で、円窓付土器は湖へ流れ込む埋没河道1から出土した。

5は胴部上半のみ。窓部は欠落する部分を推定すると正円形に近い。残存する胴部には3条1単位の波状文が8帯ある。同一層位・グリッド資料は時期幅があり、近畿第III～IV様式のなかで捉えたい。

八夫遺跡は中期を中心とする遺跡である。

6は溝SD8101下層から出土している。報告書によると、掘削時期は中期前半、埋没時期は中期後半からとされている。窓部はやや横長の楕円形。頸部はやや外反し筒状にのび、口縁部は水平に開く。口縁端部は垂下気味に面取りがされている。胴部最大径が胴部中位に位置する器形。頸部に縦方向の粗いハケメ、胴部上位に左上がりのタタキ目がある。共存資料から近畿第IV様式後葉とおもわれる。

伊勢遺跡は、下之郷遺跡の南方約2.5kmに位置する。下之郷遺跡を中心とする中期後葉の遺跡群が後期初頭に解体する。その後、後期中

葉から後葉にかけて伊勢遺跡を中心とする遺跡群が形成される。

7は直径約6mの円形もしくは五角形の建物SH-2の中央にある炉から出土した。報告書によると後期後半頃の時期が比定されている。胴部中位から緩やかにすぼまり、頸部から短く外反する口縁をもつ器形。窓部は横長の楕円形で頸部の屈曲直下に位置する。無頸壺とされているが、器形から甕の可能性もある。近畿出土のなかでもっとも新しい類例として注目できる。

(2) 京都府

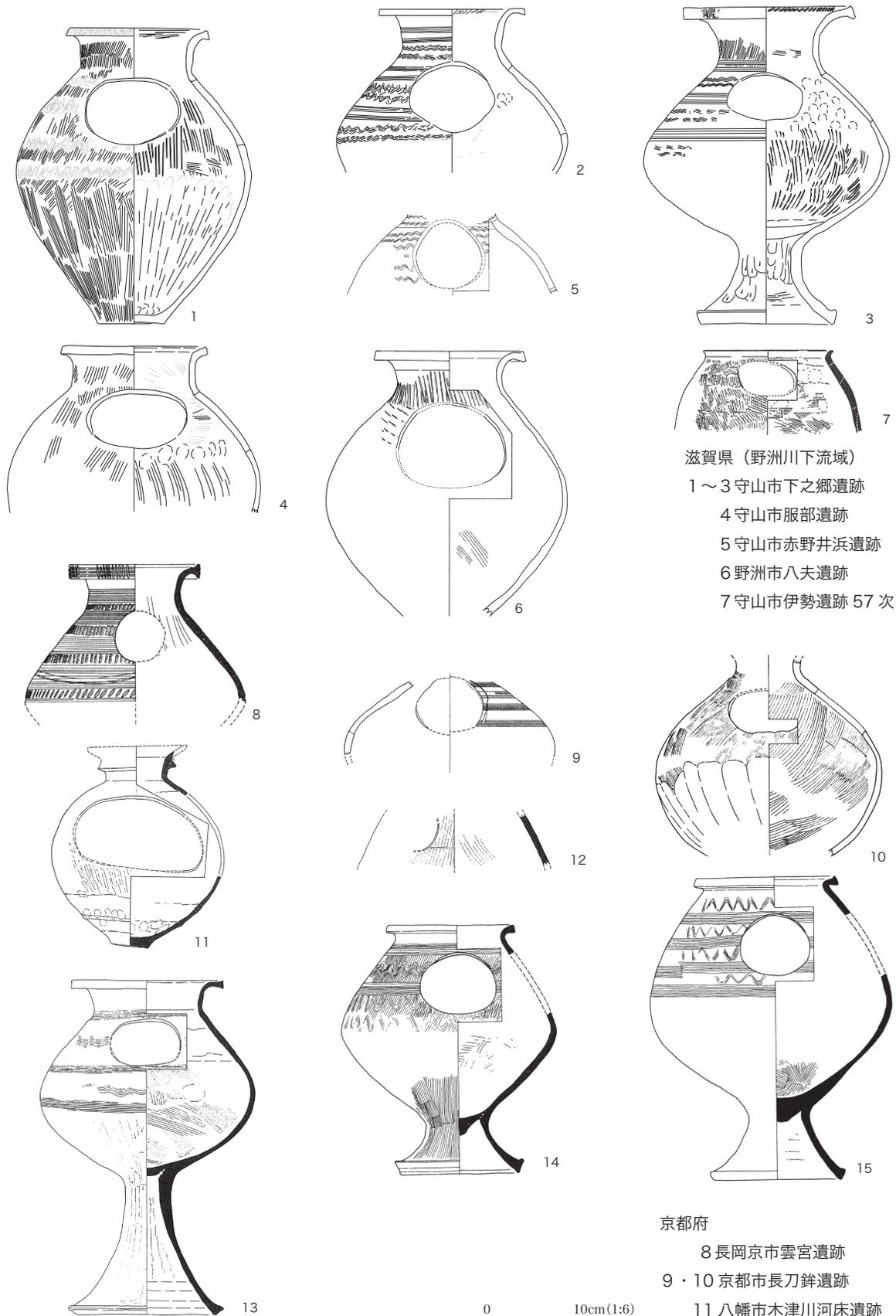
京都府下は5遺跡8例ある。

雲宮遺跡は京都盆地南西部、桂川右岸に位置する。前期環濠集落として注目されている遺跡で、長岡京跡左京第35次調査から8が出土した。窓部は正円形。胴部最大径より上位が残存する。体部最大径が胴部の中位にあたり、算盤玉状に張り出す胴部器形、頸部はやや外反する筒状をなし、口縁は水平方向に開き、口縁端部は上下に突出する。端部には凹線文がめぐり、これに等間隔で縦方向の3条1単位の沈線を入れる。頸部から胴部中位にかけて櫛描による直線と連続刺突を交互に施す。報告書では平底の復元を示しているが、下之郷遺跡と器形が類似することから脚付の可能性もある。口縁部の特徴から近畿第IV様式後葉と考えられる。

長刀鉾町遺跡は桂川の左岸、平安京左京四条三坊十三町に位置する。2点出土している。

9は胴部上位のみ残存する胴部最大径が算盤玉状に張り出す器形。窓部は図上復元によると正円形に近い。窓部の外周にヘラ沈線がある。これは窓部を穿つ前に下書きした線だと思われる。胴部上半に7条の櫛描直線文が4帯めぐり。報告書は胎土・焼成および調整手法が在来品と異なることを指摘し、伊勢湾地域からの搬入品を想定している。搬入品であるかは確認していないが、器形と装飾から野洲川下流域の可能性もある。

10は口縁部と底部を欠くが、頸部がしばむ胴張りのある球形、胴部最大径はほぼ中位にある。体部外面を縦方向のハケ調整後、胴下半は縦方向にケズリ調整をおこなう。窓部は横長の楕円形。近畿第IV様式前葉が共存する資料。



滋賀県（野洲川下流域）
 1～3 守山市下之郷遺跡
 4 守山市服部遺跡
 5 守山市赤野井浜遺跡
 6 野洲市八夫遺跡
 7 守山市伊勢遺跡 57 次

京都府
 8 長岡京市雲宮遺跡
 9・10 京都市長刀鉾遺跡
 11 八幡市木津川河床遺跡
 12・13 亀岡市時塚遺跡
 14・15 南丹市池上遺跡 12 次

※ 1～4は伊藤淳史原図をトレース
 ほかは各報告書より引用一部改変

図2 近畿出土の円窓付土器（滋賀県・京都府）

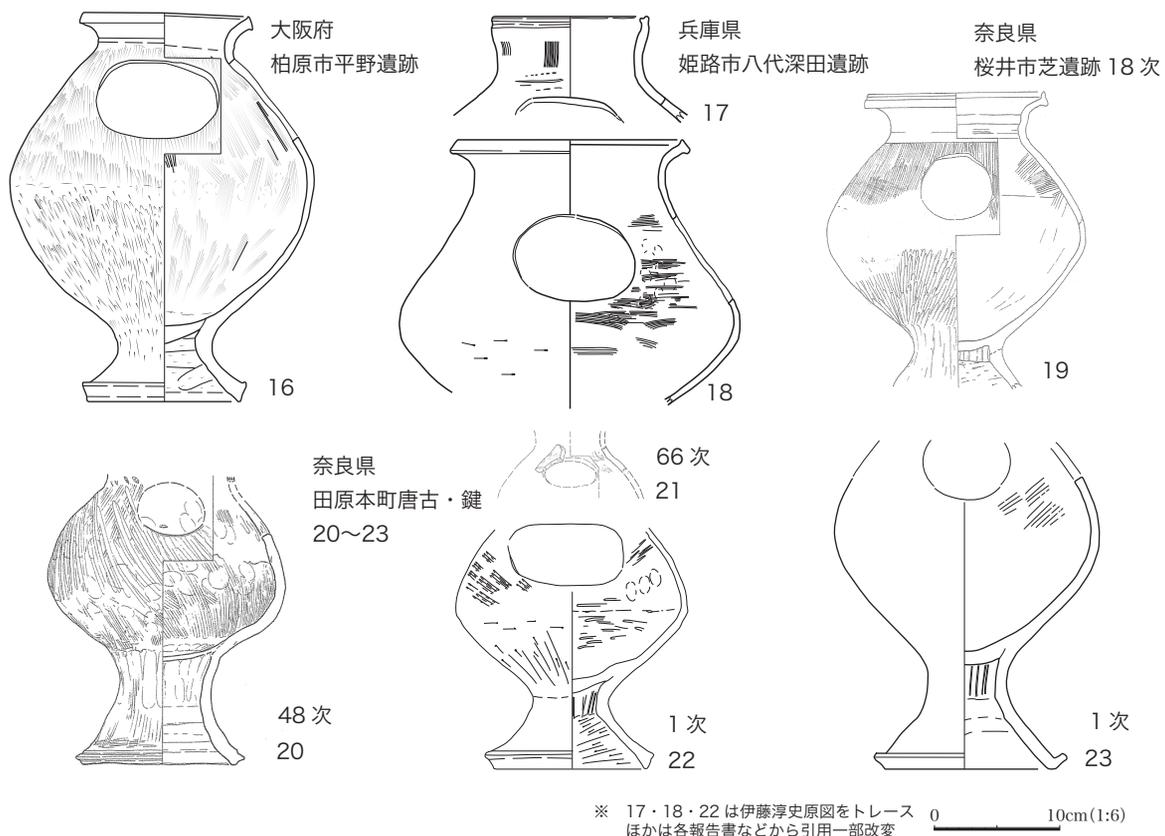


図3 近畿出土の円窓付土器（大阪府・兵庫県・奈良県）

木津川河床遺跡は木津川と宇治川が合流する地点に位置する。

11は土器溜りから出土した。口縁部を欠くものの、底部まで全形がわかる資料である。報告によると、二重口縁壺の器形になると考えられるが、成形時の粘土紐痕が底部附近に残る粗い作りである。器面全体を部分的にヘラミガキが外面で観察できるが、風化が進行し不明瞭。窓部は短軸9.5×長軸17.5cmを測る大きく穿つ横長の楕円形。共存する資料は庄内式から布留式が多いようだが、報告は庄内式以前に比定している*。

桂川を遡った先に亀岡盆地がある。盆地の中央に流れる大堰川（桂川）の左岸に時塚遺跡と池上遺跡は位置する。両遺跡間は約5kmある。12は時塚遺跡出土で、方形周溝墓の溝SD534資料。破片のため、詳細な器形は不明である。

* ここまでの資料（1～11）は、報告書の記述と実測図や写真、そして下之郷遺跡（1～3）と服部遺跡（4）については伊藤淳史原図に記載された観察記録もあわせて引用した。伊藤氏から八代深田遺跡（17・18）と唐古・鍵遺跡（22）の実測原図も含め提供いただいた。

窓部の輪郭に一部細い沈線が残り、窓部を穿つ下書き線の可能性がある。外面は縦方向の粗いハケメ調整、この上に横方向のヘラ描沈線がある。共存資料にハケメ文系土器（石黒2013）のほか、凹線文系土器などがあり、近畿第IV様式前葉から中葉に比定できよう。

13は方形周溝墓15-1墓の溝SD198から出土している。脚部が18.5cm、器高45cmを測る脚部の長いタイプ。この脚部は高杯の脚部と同じで、胴部の接合は円盤充填を用いている。下膨れの玉葱状の形状に外反気味の筒状頸部がつき、水平方向に開く口縁部が続く。全体に表面が剥離し、文様・調整が不明瞭。一方内面は比較的良好であるが、口縁部付近は剥離が進む。6～7条単位の櫛で頸胴部界から胴部最大径に直+波+直+波+直の順に施す。窓部は横長の楕円形。ハケメ文系土器と在来の櫛描文系と折衷した壺など近江地域と接近する資料を含む。近畿第IV様式中葉から後葉に比定できよう。後述する15-8号墓北溝SD523出土の土器（図6左上）は報告書で「形式不明」扱いに

なっている土器がある。おそらく人面付土器であろう。

池上遺跡は2つの円窓付土器が出土している。いずれも方形周溝墓ST717の周溝SD526から出土している。

14と15を比較しながらみていく。窓部の形状は14が横長の楕円形、15が正円形。両者ともに器形が脚付きの鉢あるいは短頸壺。14は15に比べてひとまわり小さい。14は胴部最大径が胴部中位にあり、算盤玉状の形状、15は胴部最大径が胴部中位よりやや下位にあり、丸みをおびた下膨れの器形。頸部から胴部上半の文様構成は直+波が交互に配される点は共通する。ただし、14は2帯複合櫛描文を採用し直+波が2帯めぐる。15は単体で直+波が4帯めぐる。脚部の装着は両者ともに円盤充填、14は内面の接合部の上端が剥離した痕跡が観察できた。土器の色調について、14が赤色系、15が白色系である点に注目したい。加えて円窓付土器ではない脚付無頸壺が赤色系と白色系各1点あり、同一地点であることから対をなす使用法が想起できる。なお、隣接する按察使遺跡では同時期の粘土採掘土坑が確認されている。発色の違いはあるが、赤と白の両者ともに按察使遺跡の粘土であるという*。

(3) 大阪府

平野遺跡は生駒山西麓の集落遺跡で、大和川と石川が合流する地点から2km北に位置する。山麓からの流れ込みした堆積層に新しい時期の遺物とともに出土している。

16は脚付きの円窓付土器。ほぼ球形の胴部に短く外反する口縁がつく。口縁端部周辺に強く横ナデをする。胴部は縦方向にハケ調整、下半を縦方向のケズリ、その後粗いタテミガキをする。体部内面はハケ調整、脚部の接合は円盤充填を採用する。脚部内面は横方向にケズリ調整、脚の端部は強い横ナデにより、上方へ突出する。窓部は横長の楕円形。胎土は非生駒西麓産。近畿第IV様式後半に比定できよう。

(4) 兵庫県

八代深田遺跡は姫路城の西北に位置する。西北約1.5kmに弥生時代を通じて集落の継続する辻井遺跡があるほか、八代深田遺跡の西側に

弥生集落は多い。

17は口縁部に凹線文を施す近畿出土唯一の正統派(伊藤2002)円窓付土器である。ただし、胎土は在来品であり、搬入品ではない。窓部上部から口縁までの破片資料。窓部は横長の楕円形。凹線が1条で、古い要素をもつので近畿第IV様式前葉から中葉の可能性はある。

18は胴部下半が欠落する資料。外面は全体に風化が進行し、調整は不明。頸部付近に数条にわたり筋状くぼみが観察できた。タタキ痕の可能性もある。下半は若干横方向のケズリ痕が残る。内面は口縁部から胴部上位にかけて横ナデ、中位以下はヨコハケ調整。胴部は扁平に突き出し、頸部は太く短く外反する。口縁部は強い横ナデをし、上方に突出する。底部付近が欠損しているので確定できないが、芝遺跡の口縁部と類似することから脚付きの可能性もある。窓部は横長の楕円形。近畿第IV様式後葉か。

(5) 奈良県

芝遺跡は奈良盆地東南部、三輪山東麓の扇状地上に位置する。前期から後期まで続く拠点集落である。

19は18次調査の溝SD17出土資料。脚部の裾が欠損する。胴部中位に最大径があり、算盤玉状の形状で、頸部は太く短く外反し、口縁端部は強いヨコナデにより上下に突出する。脚部の接合は円盤充填であろう。窓部は正円形。近畿第IV様式後葉か。

唐古・鍵遺跡は大和盆地のほぼ中央、初瀬川の左岸に位置する。前期から後期まで続く拠点集落である。中期は大環濠帯を有する弥生時代を代表する遺跡である。前期から中期にかけて伊勢湾地域、とくに尾張からの搬入土器は注目できる。円窓付土器はこれまでに4点出土し、1遺跡としてはもっとも多い。

20は47次出土の頸部から口縁部が欠損する資料。口縁部はおそらく強いヨコナデ調整によって作り出される芝遺跡資料の口縁部が想定できる。頸胴部界に刺突文がめぐり、胴部を粗いミガキ調整、胴部下半から脚部にかけてハケとケズリ調整で仕上げる。脚部の接合は円盤充填、現存する接合部は薄い、内面に円盤充填の端が剥離しているため、本来は厚く充填していたと考えられる。脚部の裾は凹線文が施

* 按察使遺跡の調査担当者中川和哉氏ご教示。

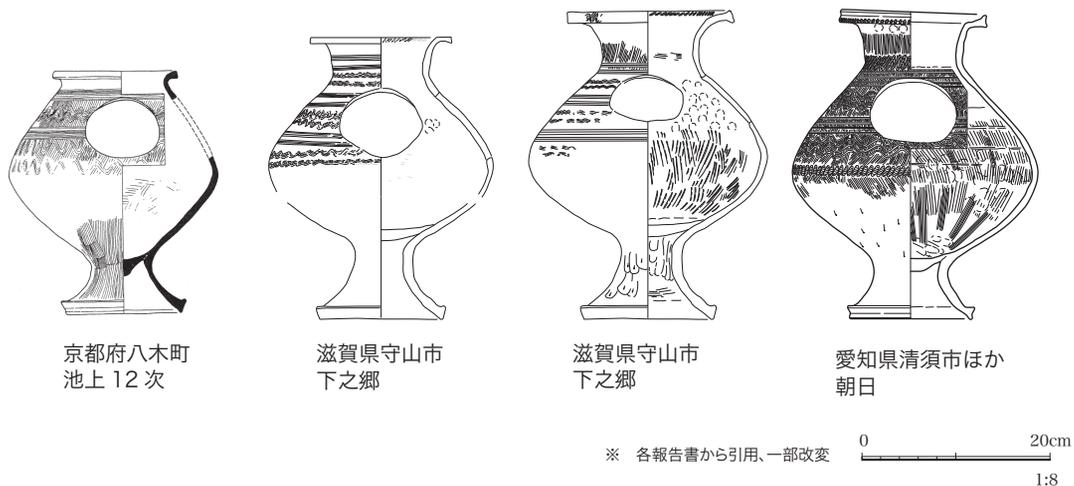


図4 装飾のある脚付円窓付土器

されている。窓部は正円形が想定できる。脚部の形態と調整から大和第Ⅴ様式とされている。

21は65次SK115第3層出土の小片である。窓部が一部かかる破片で、窓部は丁寧に面取りされている。窓部は横長の楕円形か。大和第Ⅴ-1様式とされている。

22と23は1次調査北方砂層出土資料で大和第Ⅳ-2様式。

22は窓部上位から口縁までを欠損する。胴部最大径が中位よりやや下になる、算盤玉の形状、脚部は大きく開き、袖に凹線文がめぐる。胴部上半は左上がりのタタキ調整、下半はケズリ調整で仕上げる。脚部の接合は円盤充填。窓部は横長の楕円形。

23は22と同様に窓部上位から口縁までを欠損する。窓部下位の形状から正円形と推定。胴部最大径は中位にあり、球胴形で脚部の接合は円盤充填である。袖部は強いヨコナデによって作り出されたやや斜め上方に向けた面取りで仕上げる。脚部の内面は接合部近くにしぼり痕が明瞭にのこり、袖部にむけてこのしぼり痕を掻き取るように横方向のケズリ調整をおこない、袖部付近はヨコナデで内外面を平滑にする。この脚部内面の状況は脚部のつく資料に共通する手法である。

近畿出土円窓付土器の特質

14遺跡23例を便宜上、府県単位で列挙した。ここでは23例から近畿出土の特質を朝日遺跡の完形品54例*と比較しながら指摘しておく。

まず、底部が判明する資料11例のなかで、9例が脚付きであること。朝日遺跡は3例しかないことから脚付の頻度が高いといえる。木津川河床遺跡(図2-11)は後期後半以降であるから、中期後葉を対象とすれば下之郷例(図2-1)以外は脚付きである。これら脚付きの接合法に着目すると、すべて円盤充填技法を採用している。朝日遺跡は台付甕の脚部と同じ接合法である1点を除き2点は円盤充填技法である。

窓部の形状は2種ある。ひとつは伝統的な横長の楕円形、もうひとつは正円形がある。23例中7例が正円形で、朝日遺跡の54例中15例よりやや比率が高い。

器形としては、広口の壺形が優性である。なかには池上遺跡例(図2-14・15)のように、無頸壺の頸部から口縁部が短く屈曲する器形は特異である。また、長刀鉾遺跡(図2-10)は唯一細頸である資料として留意しておく。広口壺は筒形の頸部を有し、直立するか外反気味で口縁部が水平方向に開く器形がほぼ占める。一

*『朝日遺跡』Ⅷの総集編で示した朝日遺跡出土54例を代表させて比較する(永井2009)。

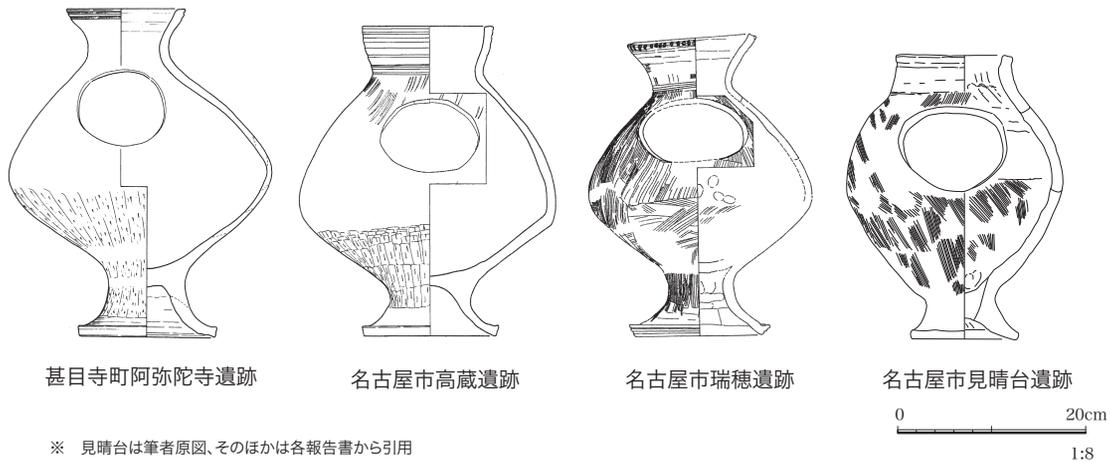


図5 装飾のない脚付円窓付土器

方朝日遺跡は頸部が筒状に直立気味の類例は多いが、口縁部が水平方向に開く例は1例(図4右端)のみである。細分した時期比定の検討はしていないが、朝日遺跡例の口縁端部が上方に突出する器形は下之郷遺跡例(図2-2・3)に後出する可能性がある。

装飾を持つ類例の頻度が高い。朝日遺跡の場合、頸部に横位沈線や刺突文、口縁部に凹線文を施す程度の装飾は少なくない。ところが胴部に櫛描による直線文や波状文を施す例はわずかに3例しかない。近畿出土の9例は特質できよう。装飾をもつ類例の分布は野洲川下流域から京都盆地を介して亀岡盆地にひろがる。いわゆる近江系土器とされるハケメ文系土器は亀岡盆地の時塚遺跡で共存する。

脚付の類例を抽出して尾張と近畿を比較すると、装飾のある近畿と装飾のない尾張が対比できる(図4・5)。ただし、兵庫・大阪・奈良に装飾する円窓付土器がないことは注目しておく。つまり、野洲川下流域を基点とする装飾する脚付円窓付土器から交流のひとつが読み取れるからだ。それは、すでに伊藤淳史が指摘しているように、内傾口縁土器・厚口鉢に代表される弥生前期以来の広域交流が基層にあるからといえよう(伊藤1994・2002)。

おわりに

野洲川下流域を基点に捉えた装飾のある脚付円窓付土器を伊藤淳史は傍流円窓付土器とよび

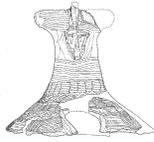
(伊藤2002)、高橋信明は擬似円窓付土器とよんだ(高橋1995)。朝日遺跡の例(図4右端)は搬入品と断定できないが、白色系の色調から他の朝日出土例と比較すると異質である。傍流であり、擬似であるともいえる。円窓付土器の地域間交流が、一方通行ではない証拠のひとつとして重要である。野洲川下流域から京都盆地、亀岡盆地へとつながる装飾のある脚付円窓付土器は、朝日遺跡を基点とした伝統的な円窓付土器とは別系統の往来が指摘できよう。

最後に、図6を示す。石川県八日市地方遺跡出土の人面付土器と時塚遺跡の「形式不明」土器は類似する資料として注目できる。円窓付土器と同一視はできないが、ともに近畿第IV様式以前に相当する。八日市地方遺跡の円窓付土器(図6右)は近畿第IV様式併行で、時塚遺跡も脚付の円窓付土器がある。円窓付土器が人面付土器と同一系譜であるとはいえないが、胴部上半に焼成前穿孔をもつ土器として比較検討の対象となろう。

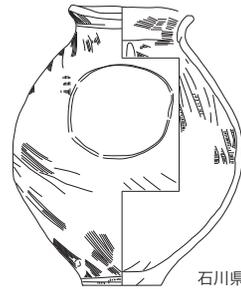
〈謝辞〉資料実見あるいはご教示でお世話になった諸機関・諸氏に末筆ながら感謝申し上げます。(敬称略・順不同)伊藤淳史、京都府埋蔵文化財調査研究センター(小池寛・小山雅人・中川和哉)、大阪府弥生文化博物館(秋山浩三・角南なつみ)、赤穂市埋蔵文化財センター(秋枝芳・中川猛)、田原本町教育委員会(藤田三郎)、愛知県埋蔵文化財センター(石黒立人・宮腰健司)、名古屋市博物館(村木誠)



時塚遺跡



石川県八日市地方遺跡



石川県八日市地方遺跡

※各報告書から引用・トレース
0 20cm 1:8

図6 人面付土器と円窓付土器

参考文献

- 秋枝芳ほか 1977 『八代深田遺跡』(姫路市文化財調査報告VI) 姫路市教育委員会
- 石黒立人 2013 「くハケメ紋系土器」との往還 『弥生土器研究の可能性を探る』 石黒立人
- 石崎善久ほか 2009 「時塚遺跡第15・17次」 『京都府遺跡調査報告集』 第135冊財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 伊藤淳史 1990 「柏原市平野遺跡出土円窓付土器」 『泉北考古資料館だより』 No.42 大阪府教育委員会
- 伊藤淳史 1994 「弥生時代における地域間交流—伊勢湾地方弥生土器の型式変化と移動—」 『史林』 77巻4号京都大学文学部
- 伊藤淳史 2002 「円窓付土器からみた弥生時代の交流」 『川から海へ1』 (14年度秋季特別展図録) 一宮市博物館
- 伊庭 功 2003 「近江南部の中期弥生土器」 『古代文化』 第55巻第5号財団法人古代学協会
- 伊庭 功 2004 「近江南部の弥生時代中期から後期初頭の土器編年」 『弥生中期土器の併行関係 発表要旨集』 (第53回埋蔵文化財研究集会) 埋蔵文化財研究集会第53回研究集会実行委員会
- 大橋信弥ほか 1986 『服部遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 滋賀県教育委員会ほか
- 久保哲正ほか 1985 「長岡京跡左京第35次調査概要—左京六条二坊一町—雲宮遺跡—」 『長岡京市文化財調査報告書』 第14冊長岡京市教育委員会ほか
- 小島睦夫 2001 『伊勢遺跡第57次発掘調査報告書』 守山市教育委員会
- 小林行雄ほか 1943 (1976) 『大和唐古彌生式遺跡の研究』 (京都帝國大學文學部考古學研究報告第16冊) 桑名文星堂 (臨川書店復刻)
- 佐々木好直 2005 『芝遺跡』 (奈良県立考古学研究所調査報告第91冊) 奈良県教育委員会
- 高橋信明 1995 「円窓付土器考」 『考古学フォーラム』 6考古学フォーラム
- 田代 弘 1985 「木津川河床遺跡出土の円窓付土器」 『京都府埋蔵文化財情報』 第17号財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 寺島孝一ほか 1984 『平安京左京四条三坊十三町—長刀鉾町遺跡—』 (平安京跡研究調査報告第11輯) 財団法人古代学協会
- 徳綱克己ほか 1999 「八夫遺跡第8次発掘調査概要」 『平成9年度中主町内遺跡発掘調査年報』 (中主町文化財調査報告書第55集) 中主町教育委員会 (現野洲市)
- 中川和哉 2003 「池上遺跡第12次」 『京都府遺跡調査概報』 第108冊財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 中村健二ほか 2009 『赤野井浜遺跡』 滋賀県教育委員会ほか
- 永井宏幸 2004 「伊勢湾周辺」 『弥生中期土器の併行関係 発表要旨集』 (第53回埋蔵文化財研究集会) 埋蔵文化財研究集会第53回研究集会実行委員会
- 永井宏幸 2009 「円窓付土器」 『朝日遺跡』 VIII (愛知県埋蔵文化財発掘調査報告書第154集) 財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
- 永井宏幸 2013 「円窓付土器からみた地域間交流」 『弥生時代政治社会構造論』 (柳田康雄古希記念論集) 雄山閣
- 藤田三郎 2003 「特殊土器」 『奈良県の弥生土器集成』 奈良県立橿原考古学研究所
- 藤田三郎ほか 2009 『唐古・鍵遺跡I—範囲確認調査—』 (田原本町文化財調査報告書第5集) 田原本町教育委員会
- 宮腰健司ほか 2000 『朝日遺跡』 VI (愛知県埋蔵文化財発掘調査報告書第83集) 財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
- 山崎秀二ほか 1986 「下之郷発掘調査概報」 『守山市文化財調査報告書第20冊』 守山市教育委員会